城山三郎全集 1

男子の本懐

山三郎全集
1

新潮社

男子の本懐

城山三郎全集 第1巻

一九八〇年 一月二五日 発行
一九八一年 三月二〇日 二二刷
定価一二〇〇円

著者 城山三郎
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一（〒一六二）
電話 業務部 東京（〇三）二二六六－五一一一
編集部 東京（〇三）二二六六－五四一一
振替 東京四－八〇八番

印刷 錦明印刷株式会社
製本 神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Saburō Shiroyama, 1980 Printed in Japan

城山三郎全集 第一巻 目次

男子の本懐
詩 221
詩二題——重患 僧再来 223
伝説以後 224
蛸ノ泡 225
ナショナル アピール 226
旗 228
（テレビドラマ）
汽車は夜九時に着く 231

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

随筆

日比谷公園のベンチで 263
「大義」のことなど 264
「総会屋」その後 267
平和行進に参加して 268
娘のデモと闘牛 270
おそるべき老人たち 272
めぐりきた十八度目の八月 275
私の小説作法 276
一大事とは何か 278
国と言葉 279
五月二十七日のラッパ 281
戦後余生の連続として 282
学生時代 284
ふるさとの春 285
「零からの栄光」をめざして 286
生と死を分けた〝一歩の距離〟 288
マスターズ・ゴルフ観戦記 294
雄気堂々の句 312
要塞地帯がなくなったとき 314
企業ばなれの夢さめて 316
目には緑、耳には静けさ 318
名門・背広・軍服 320
ある卒業式 325
風呂の中で 327
真の勇者とは 328
大事な日付 330
陽気なアメリカ人 332
スイス銀行 334
打出小槌町の住人たち 354
五月病を逃れて 355
本当に生きる日とは 358

解説

361

男子の本懐

男子の本懐

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序　章

内閣が倒れた。

かねて経済運営の手づまり、汚職の続発、重要法案の流産などでゆさぶられてはいたが、内閣総辞職の直接の原因となったのは、一軍人の謀略であった。

当時、満洲一円を支配していた張作霖が、しだいに日本側に背を向けはじめたのに対し、業を煮やした関東軍の一大佐が、ひそかに工兵隊を指揮し、北京から戻る張の専用列車を爆破して、張作霖を抹殺した。

真相の発表はいち早くおさえられ、事件そのものも、「満洲事件」「満洲某重大事件」などというぼかした呼称で呼ばれたが、外国の報道機関は、日本軍部の犯行である旨、流していた。

国会での野党の追及に対し、首相は、

「種々の疑惑の解けるように、種々の方法を講じて調査して居るのであります」

とか、

「慎重に考慮して、これを調査して居るという以外、別にいう必要はない」

などとくり返したが、天皇の詰問に対しては、元老筋からの注意もあったため、最初は、

「帝国陸軍の者の中に、嫌疑があるようでございます」

と述べ、天皇の御意向に応え、軍紀を厳正にし、厳重な処分を行う、と奉答した。

だが、軍部などの圧力が強まるにつれ、首相は、頬かむりで通した方が国家の体面と軍の士気を守ることになるという主張におされ、中途から調査をうやむやにし、中国人による犯行説を匂わせた。そして、当の大佐に対しては、事件発生を予防し得なかった警備上の手落ちを問うという軽微な行政処分でかたづけた。

この処理報告を聞かれた天皇は、

「最初に申したこととちがうではないか」

と激怒して席を立たれ、

「総理の言うことは、二度と聞きたくない」

と侍従長にいわれた。

天皇の信任を失っては、もはや内閣は成り立たない。与党内には、「こうした経緯で総辞職するのは、悪例を残すことになる」との反対論もあったが、首相は恐懼して、閣内の辞表をとりまとめた。

長州閥の後継者田中義一陸軍大将を首班とする政友会内閣は、こうして、在任二年二カ月で倒れた。

しかし、このとき政友会は、なお議席二三七を占め、野党の民政党一七三を圧倒していた。

このため、政友会の一部には、すでに陸軍からも浮き上がっていた党首田中を見すて、先に脱党していた一派や貴族院筋と組んで、ふたたび政権を受けようとする動きが起こった。

一方ではまた、政党にとらわれず、山本権兵衛海軍大将らを担ぎ出そうとする薩摩派の蠢動があり、宇垣一成陸軍大将や国粋主義者の平沼騏一郎を首班とする超然内閣をつくろうとする貴族院の動きもあった。

もちろん、憲政の常道からすれば、たとえ数に於て劣勢とはいえ、野党第一党の民政党へ政権が移るべきであった。

後継首班奏請の任に当たる元老西園寺公望は、あわただしい動きや、さまざまにとび交う思惑には目もくれず、この常道を踏んで、民政党総裁浜口雄幸を次期総理に推すことにした。浜口は、その容貌からして「ライオン」というあだ名のある土佐出身の剛直な男である。

人がよくて、それまでかつがれるだけかつがれてきた形の田中は、田舎言葉がぬけず、「おらが」を連発するくせがあり、「おらが総理」と呼ばれていたが、いよいよ首相官邸明け渡しの破目になって、側近につぶやいた。

「ここの官邸を、みんながカフェー・オラガーというそうじゃが、今度はカフェー・ライオンと看板が変わるんじゃろうのう。しかし、おらもまだまだ働くつもりじゃから、いまにまた盛り返して、カフェー・オラガーを開店する考えじゃよ」

新総理になる浜口雄幸の邸は、小石川久世山に在る。借家だが、いずれ買い取る約束である。庭には、雑然とした木立がひろがっている。

桜、松、欅、竹、八つ手など、浜口はむやみと木を植え、石灯籠こそあるが、さっぱりわけのわからぬ庭となった。庭というより、武蔵野の一部を切りとった小さな雑木林という感じで、その木立の中を、浜口はときどきライオンのように往きつ戻りつする。

あるいは、居間の端に坐って、この庭をじっと見つめる。遠くを見る目つきで、何かを考えるように、夕闇が下り木木の姿が見えなくなっても、眺めていたりした。

もっとも、この数日は、庭歩きも端坐する時間もなかった。新聞記者が押しかける。次から次へと客が来る。猟官の客が多かった。大臣になりたくて、一日に三度もやって来た元大臣もあった。

その度に、秘書や家人が、足どりも軽く動き回る。喜びがにおい立つあわただしさでもあった。

もっとも、あわただしさのわけがわからず、当惑しているこの家の住人が一人、いや一匹居た。猫の「正太郎」である。毛並みはよくない。というより、野良猫出身である。浜口の末娘が、かわいそうだからと、拾ってきた。

「正太郎」とは、いかにも浜口らしい命名であった。「正直」とか「正義」とか、浜口は「正しい」という言葉が好きである。政権をにぎったあとは、「強く正しく明るい政治」というのを、党のスローガンに打ち出そうと、ひそかに考えている。小学生がつくった標語みたいだが、浜口には、それ以上正確に自分の理想を訴える文句はない気がした。

浜口は、「正太郎」を可愛がった。

「正太郎」は、家の中で、いつも浜口について回った。浜口が坐ると、その脇息の上が「正太郎」の定位置となり、脇息のひとつが役に立たなくなる。浜口の妻夏子は、食事のとき「正太郎」に餌をやることを禁じていたが、浜口だけはときどき新聞紙に、こっそり食物を分けてくれた。

その親密なライオンと猫の関係が、この数日くずれている。

浜口は、一向、「正太郎」の相手になってくれない。忙しく動くひとびとの間で、「正太郎」は、うろうろする。

夜がふけてからわずかに、邸には静寂が戻る。

浜口は、ひとり居間に正坐する。いつも正坐であり、あぐらをかくということをしない。「正太郎」もはじめてほっとして、脇息に上がる。だが、浜口は、いつものようにあそんではくれない。腕組みしたり、書類に目を通したりして、物思いにふける。家人は、だれも寄らない。

重い静けさの中で、浜口はふっと、好きな『唐詩選』の中の詩のひとつを思い浮かべる。「従軍北征」という詩である。

天山雪後海風寒
横笛偏吹行路難
磧裏征人三十万
一時回レ首月中看

「人生の行路難をよくうたっている」

と、浜口は子供たちに話したことがある。その詩が、新しい感懐を伴って胸に迫ってくる。

天山雪後海風寒

……

浜口にとって、総理としてはじまる人生は、華やかでも光栄でもなくて、大きな行路難を抱えこむことでしかない気がする。行く手に大きな問題が立ちはだかっているからである。

どの内閣にも、それぞれ難問はあろう。だが、これから率いる内閣は、経常の問題に加え、軍縮があり、さらに金解禁に進んで取り組むつもりである。

金本位制への復帰――それは、十二年間、八代の内閣が手をつけようとしてつけかねた大事業である。経済の行きづまりを根本的に打開するには、この方策しかなく、このため国の内外から望まれてはいるものの、本質的には、極端な不況政策である。運用が難しいばかりでなく、不人気と身の危険さえ予想される仕事でもあった。

やがて、その予感が適中する。

浜口は、骨太の体で、逆立つ白髪に、角ばった大きな顔。つり上がった太い眉、ぎょろりとした目、大きな獅子鼻、盛り上がった白い鼻ひげ、一文字にひいた大きな口と、容貌は魁偉であった。

その上、口数が少なく、気難しそうで、ほとんど笑顔を見せたことがない。

エピソードがある。

ある宴会の途中、外は雷雨となり、やがてすぐ近くへ雷が落ちた。

すさまじい稲光と轟音に、芸者の一人が、

「こわい！」

と思わず、身近の浜口に抱きついた。だが、次の瞬間、浜口の顔を見て、

「こちらの方が、もっとこわい！」

と、気を失ったという。

しかしながら、この数日は、そのこわい顔にも、珍しく微笑がにじんだ。一党を率いてきた総裁として、政権を預かるほどの本望はない。

現に民政党本部では、政権掌握ときまったとき、碁石やマージャン牌が興奮してばらまかれ、「万歳！」の叫びや、抱き合っておどり狂う者、「これだから政治はやめられない」と叫ぶ者などで、大はしゃぎとなった。

浜口は、行きつけの東京駅地下の床屋に出かけ、白い髪とひげの手入れをした。

帰ると、また記者たちに囲まれる。

快い質問を浴び、浜口は笑う。

ただ、その笑いは、浜口の容貌風采とはおよそ不似合いな、少女のような笑い方である。

照れかくしに団扇を持ち、それも風を送るのではなく、むやみにくるくる回しながら、小声で笑う。記者たちには、その笑い声が、

「オホ、フォ、フォ、ホ」

という風にきこえた。とても、ライオンの笑いではない。やはり、お嬢さんの笑い方である。

そういえば、浜口の名前の雄幸を、世間では「ゆうこう」と読む。字も音も勇壮で、いかにも浜口に似つかわしいのだが、実は、この名前、正確には「おさぢ」と呼ぶべきであった。

男子の出生ばかり続いた彼の家では、娘を欲しがり、生まれてくる子に「お幸」という名を用意した。

ところが、生まれたのは、またまた男の子。やむなく「雄幸」と書きかえた。土佐の発音では「おさち」でなく、「おさぢ」と濁る。

この末男に対し、両親はそれでも娘を見るような目で接したためであろうか、雄幸は物静かで、気のやさしい子供であった。むしろ、臆病でさえあった。

そうした名残が、少女のような笑い方ににじんでいた。

昭和四年七月二日午後一時、浜口は参内して、天皇より組閣の大命を拝した。

出かけるまぎわ、家の子郎党たちが万歳を唱えようとするのを、浜口はあわてて制止した。

「いかん、いかん。大命をお受けしたあとにしてくれ」

だが、そうした浜口らしい言い分も、この場合、通用しなかった。

緊張した顔つきのまま、浜口は歓声の声で送り出され、かたい表情でまた万歳に迎えられ邸に戻った。

組閣がはじまった。大臣候補者が、次々に呼びこまれる。

この数日の間に、すでに腹案ができ、ある程度の折衝もすんでいた。このため、新聞辞令が、かなり正確な大臣リストを伝えていた。

ただし、新内閣で最も重要なポストとなる大蔵大臣だけが、空白であった。各紙とも、一応あれこれ複数の名前を書き立てるが、いずれも、自信のある書きぶりではなかった。

民政党は、緊縮経済を基調とした政党だけに、財政問題に明るく、財政通を抱えこんでいる。町田忠治、若槻礼次郎、片岡直温、江木翼等々、大臣経験者をふくめた大物の蔵相候補だけでも、五指にあまる、といわれていた。

だが、一向に、はっきりしたひとつの名前が浮かばない。候補が多すぎて、鞘当てしているようにも見えた。最重要なポストだけに、拙速を避け、慎重に慎重を期している。とりあえずは、浜口首相が蔵相兼任という形で発足する、との観測が流れた。

浜口は、ひそかに微笑した。それは、策を弄することのきらいな浜口にしては、珍しい策略であった。

首相の蔵相兼任説の煙幕を流しながら、浜口には、実は意中のひとがあった。

ただし、その男の名を早くから出せば、つぶされる心配があった。その男のことは、二、三の最高幹部に打ち明けただけ。あとは、ぎりぎりまで秘しておいて、党内を強行突破する作戦である。

組閣について、党内からはさまざまな注文が出されてい

た。

〈何よりも、党人を採用せよ。大臣の椅子は、ひとつ残らず党員に配分せよ。われわれは野党としての悲哀をなめながら、倒閣に努めてきた。そうした苦労に報いるべきで、党活動に功労があり、知名度の高い者はもちろん、若手党員も抜擢すべきである〉

〈党活動をしていない官僚や官僚出身者は、つとめて避け、官僚臭のない明るい政党内閣をつくるべきである〉

〈貴族院議員の入閣も、望ましくない。とくに前内閣はただ一人の貴族院議員も閣僚に加えず、その点での世間の評判がよかっただけに、浜口内閣に対しても、世間は同様な期待をしている〉

浜口は、こうした声に耳を傾けながら組閣を進めてきたが、もちろん要望のすべてをのむわけには行かない。まず外務大臣には、ロンドン軍縮会議を控えている折柄、協調外交の推進者である元外相幣原喜重郎を。「幣原外交」はかねてから民政党の表看板のひとつになっており、幣原は党籍こそないが、内輪のひと同然に考えられていた。

要望に反く入閣は、二人。一人は、貴族院から渡辺千冬子爵。もともと政友会寄りの体質を持つ貴族院の中で、少数ながら民政党を支持してくれるグループをつなぎとめておくために必要であった。

いま一人が大問題であった。

その男は、まず民政党員ではない。それに、官僚同然の出身である。さらに、貴族院議員でもあった。二重三重に党内の要望に反くわけである。しかも与えるのが蔵相という枢要なポストだけに、漏れれば、はげしい反対が予想された。

だが、浜口は断乎として、この男を蔵相に据える肚である。どんな反対があろうと、この男は譲らぬ。義理とか行きがかりとか、その他もろもろの思惑によるのではない。この男の専門的能力を買うからである。この男なくしては、金解禁を実行し得ないと信ずるからである。

仕事を進めるために、この男が必要であった。国家権力の頂点で、仕事のために男と男が結ばれる。浜口は、そのロマンに賭けて、強行突破をはかった。

組閣本部には、大臣候補が喜色を隠さず続々と現れた。新聞辞令どおりの顔ぶれである。

突然、記者団がどよめいた。下馬評にはないその男が現れたからだ。リストでは空白になっていた最重要なポストを埋めるしかない男が。

その男——井上準之助を迎えた記者団は、二通りの反応を見せた。「やっぱり」という組と、「意外だ」「おどろいた」と、ささやく組である。

浜口が党の公約である金解禁に取り組むことはまちがい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com